

# 天平勝宝四年二月二日に聞く歌

——壬申年之乱平定以後之歌二首——

鈴木 一

一

大伴家持は、天平勝宝四年二月二日の日付と共に次の伝誦歌二首を萬葉集卷十九に筆録している。

壬申年之乱平定以後歌二首

大君は神にしませば赤駒の腹這ふ田居を都と成しつ

右一首大將軍贈右大臣大伴卿作

大君は神にしませば水鳥のすだく水沼を都と成しつ

作者未詳

右件二首天平勝宝四年二月二日聞之即載於茲也

(卷十九、四二六〇、四二六一)

古歌が伝誦者によつて歌われ、それを記録した例は、「家持歌日誌」と称される卷十七以降四卷においてもしば

しば見受けられる。当該二首と同じ卷十九収載歌に限つても、八例を見る。とりあえず左注でその所在を示せば、以下の通りである。

右一首歌者幸<sub>二</sub>於芳野宮<sub>一</sub>之時藤原皇后御作 但年月未<sub>二</sub>審詳<sub>一</sub> 十月五日河辺朝臣東人伝誦云尔

(卷十九、四二二四左注)

右二首歌者三形沙弥承<sub>二</sub>贈左大臣藤原北卿之語<sub>一</sub>作誦<sub>レ</sub>之也 聞<sub>レ</sub>之傳者笠朝臣子君 復後伝誦者越中国掾久米朝臣広繩是也

(卷十九、四二二八左注)

右一首伝誦掾久米朝臣広繩也

(四二三五左注)

右二首伝誦遊行女婦蒲生是也

(四二三七左注)

右件歌者伝誦之人越中大目高安倉人種麻呂是也 但年月次者随<sub>二</sub>聞之時<sub>一</sub>載<sub>二</sub>於此<sub>一</sub>焉

(四二四七左注)

右一首治部卿船王伝誦之 久邇京都時歌 未<sub>レ</sub>詳作主<sub>二</sub>也<sub>一</sub>

(四二五七左注)

右一首左中辨中臣朝臣清麻呂伝誦 古京時歌也

(四二五八左注)

右件歌伝誦大伴宿禰村上同清継等は也

(四二六三左注)

これらの卷十九伝誦歌の筆録状況と当該作とを比較する際、一見して目立つのは、歌の伝誦過程に関する説明の簡潔さである。題詞も含めたその記録のあり方を比較しても、とりわけ簡潔であるように見える。

歌の作者を示していながら、伝誦者を記さない左注がその第一点として指摘できよう。また、伝誦歌の享受の場に関する説明やそれを伝え聞いたのが家持自身であるのかどうかも、この記述からは窺い知ることができない。他の伝誦歌に対する記述が、由来や享受の場に筆が及ばずとも、

少なくともその伝誦の担い手は示しておこうとするのに対して、当該二首の題詞、左注には、そうした面での積極性がまったくと言って良いほど見受けられないのである。

一方で、第一首の作者に対する記述は、この簡潔さの中にあつて、作者死後の贈位に及ぶ。また、この一首の作者を通説の通り大伴御行とするのであれば、現存する史料では確認の出来ない「大將軍」との称号も付す。さらに、二首を聞いた時点については、「天平勝宝四年二月二日」と日付までも明記する。伝誦を支えた人や場の事情に関する簡潔さとは対照的で、記録する姿勢としては、先掲八例に比して逆を向いたかのような方ですらある。それは、まるで当該二首の特異性を主張しているかのようにも見える。もし、筆録者である家持に何らかの意図があるとしたら、我々は、そこを読み取るべきではないだろうか。そして、こうした筆録姿勢から垣間見える家持の当該作への心寄せの有り様へと理解を進めるべきであろう。

当該二首には、これまで数多の言及がなされてきた。しかし、右に述べたような問題点を中心にすえた考察は多くない。この状況の中で、本稿と同様の問題点に着目し、新たな視点から詳細な検討を加えられたのが市瀬雅之氏であ

る。<sup>①</sup> 卷十九における歌日誌の流れの中で、当該二首の異質な題詞・左注の様に着目した市瀬氏の論考は、本稿にとっても多くの示唆に富むものである。けれども、第一首作者とされる御行の業績や当該二首の享受の場については、さらなる検討を要すべき点もあるのではないかと本稿は考える。以下、こうした点を中心に考察を進めてみたい。

## 二

当該二首は、両者に共通する歌句「大君は神にしませば」が、現人神思想の先駆的表現例としての可能性を有するものとして注目されてきた。題詞に「壬申年之乱平定以後歌」とあることが、この二首を、そのようにとらえる見方を支えてきたと言えよう。この歌句を共通して用いる作は、当該二首に以下の四例を加えて、集中に六例見えてくる。

大君は神にしませば天雲の五百重の下に隠りたまひぬ

(卷二、二〇五)

大君は神にしませば天雲の雷の上に廬りせるかも

(卷三、二三五)

大君は神にしませば雲隠る雷山に宮敷きいます

(卷三、二三五或本歌)

大君は神にしませば真木の立つ荒山中に海をなすかも

(卷三、二四一)

二〇五番歌は、文武三(六九九)年に薨去した弓削皇子挽歌である。二三五番歌及び或本歌は、持統朝以降にのみ確かな例が現れる「柿本人麻呂作歌」の表記が題詞にあることから、持統朝もしくは文武朝の作と考えられる。二四一番歌も同じ理由から持統朝以降の作と見てよいだろう。いずれの例も、その作歌時期に諸説はあるけれども、天武朝へと遡ることは出来そうにない。

これら一連の作、とりわけ人麻呂作歌に先行する可能性のある当該二首をめぐる研究は、まずは歌の成立時期を中心として進められてきた。これまでの諸説を整理して示せば、おおよそのところ以下のようにまとめられるだろう。

① 壬申の乱終結直後の天武天皇即位儀礼における作とするもの<sup>②</sup>

② 藤原宮における持統天皇即位時の作とするもの<sup>③</sup>

③ 天武殯宮における作とするもの<sup>④</sup>

それが当然のこととは言え、先行諸説における考察は歌句の理解を中心にして進められてきた。特に、後半三句に

人為を超えた事業として歌われる「都となす」地が、明日香浄御原宮であるのか、藤原宮であるのか、という問題が主要な論点となった。そのいずれが「都」となる前段階の環境を含めて両歌の内容にふさしい土地と言いうるのか、が問題とされ、議論は、「都」となる地をどこに求めるのかに力点が置かれた。そして、この問題の解明をめぐる議論に歌句の理解を連携させつつ進んできた感がある。

ただ、これらの諸注や先行研究の手が、まだ探り切れていない部分は充分に残されている。第一首の左注に示された作者注記と、表現内容との関わりはどう見るべきであろうか。従来の諸説は「都」をどこと定めるかの議論を先行させるがゆえに、主として歌の成立した時と場の具体的な解明に注力してきた。しかし、「大將軍贈右大臣大伴卿」が、いかなる立場でこの一首を成したのか、それに対応する作者未詳歌は、いかなる立場の者の手になる作なのか、この点に理解が届いているとは言い難いのではないだろうか。

前述したように、諸説では第一首の作者として左注に記される「大將軍贈右大臣大伴卿」は、一貫して大伴御行とされている。根拠となるのは、『続日本紀』の薨去記事で

ある。

大納言正広參大伴宿禰御行薨。帝甚悼惜之、遣直  
広肆榎井朝臣倭麻呂等、監護喪事。遣直広弔藤原  
朝臣不比等<sup>一</sup>、就<sup>二</sup>第宣<sup>三</sup>詔、贈<sup>四</sup>正広弔大臣<sup>五</sup>。御  
行、難破朝右大臣大紫長徳之子也。

（『続日本紀』巻二、大宝元年正月十五日条）  
これによれば、「正広參」で没したとあり、その際、御行が「大伴卿」と称されるにふさわしい大納言の地位にいたことが知られる。また、続く記述に「贈正広弔大臣」とあり、左注の作者注記と一致するからである。たしかに、壬申の乱以降でこの他に左注の条件を満たす人物は見当たらない。第一首の作者を大伴御行とする考えは動かないものと見てよいだろう。御行は、この二首を筆録した家持から見れば祖父安麻呂の兄にあたる人物である。

一方で左注に見える「大將軍」の称号に該当する事績が御行には見当たらない。この点については、諸注釈類も不明とするか、『釋注』のように「壬申の大將軍と見なされてこの称号が存するものか」と推測にとどまるかのいずれかである。また、家持の父大伴旅人の大宰帥任官でさえ『萬葉集』以外にはその記録が見えないことを考慮するな

ら、臨時官である「大將軍」称号には、史料の不備を考慮のも一つの立場としてある。しかし、そうした記述が成り立つ事情が当該歌の筆録当時にあるとすれば、その可能性を検討しておく必要もあるのではないだろうか。今一度、考察を加えた上で一案を述べてみたい。

御行の経歴で注目されるのは壬申の乱における軍事行動や戦場での果敢な活躍の軌跡ではない。『日本書紀』にあつては異例の一卷を費やして描かれる「壬申紀」（卷二十八）には、同族の大海吹負や馬來田、そして弟の安麻呂もその名を見せるのに対して、御行の存在感は皆無だからである。しかし、御行が大海人皇子勢の一員として、何らかの形でこの戦乱に従軍したことは、次に示す『続日本紀』中の功績者報奨記事に彼の名が見えていることで確かなものと考えてよい。

又壬申年功臣、隨功第亦賜食封、並各有差。  
又勅、先朝論功行封時、賜村国小依百廿戸、当麻公  
国見、縣犬養連大侶、梗井連小君、書直知徳、書首尼  
麻呂、黄文造大伴、大伴連馬來田、大伴連御行、阿倍  
普勢臣御主人、神麻加牟陀君兒首一十人各一百戸。

（『続日本紀』卷二、大宝元年七月二十一日条）

右の記事は、大宝元年の勅ではあるけれども、連記される人名の姓が天武十三年の八色姓以前のものであることから、乱の終息後数年内の史料を反映させていると言われている。この記事中に、御行と並んで同等の功封査定を受ける馬來田は、「壬申紀」において、大海人皇子一行が吉野脱出直後、菟田吾城にいち早く駆けつけ近侍した功臣として描かれる人物である。その馬來田と功績を同等に扱う当該記事は、壬申の乱における確かな功績が御行にもあつたことを裏付けていると考えてよい。

では、なぜ「壬申紀」に御行の名が記されることがなかったのだろう。おそらく、戦場での武勇や実戦指揮官としての活躍が彼の自分ではなかったからではないか。御行の名が史書に登場し始めるのは、戦乱の渦中ではなく、むしろ平時となつた天武持統朝においてだからである。その中で本稿が着目するのは次の任官記事である。

諸王四位栗隈王為兵政官長。小錦上大伴連御行為大輔。

（『日本書紀』卷二十九、天武四年三月十六日条）  
右の記事によれば、この時、兵政官の長官に栗隈王が、大輔として御行が任命されたとある。御行が命を受けたこ

の兵政官とは、いかなる組織であつたのだろうか。

史料上には、当該記事が兵政官の名の初出となる。任官のみを記すため、その設置時期も存続期間も不明ではあるが、概ね後の令制下における兵部省の前身官庁と見られている。この兵政官が目指したのは、唐兵部の職掌にならった軍事行政の統轄機関であり、その主たる目的は唐軍制をモデルとした律令軍制の整備であつたらしい。<sup>(5)</sup> こうした天武・持統朝に見られる軍制改革の担い手として、御行は拔擢されたようである。軍事氏族としての伝統を濃厚に有する大伴氏を代表する形で、御行はこの業務に取り組むことになったと推察される。

彼が「壬申紀」にその名を見せずとも功績評価の列に連なつたのは、この人事から窺い知れるのかも知れない。後の兵部省がそうであるように、兵政官も軍事司令官として指揮権を発動するような部署ではなく、兵士や兵器、武器の管理、牛馬や連絡網の整備など軍政面での任務を主要な職掌としたことが指摘されている。<sup>(6)</sup> つまり、兵站や調達を得意とした彼が壬申の戦乱でその才能を発揮したことが功績報奨へとつながり、この人事発令となつたのではないだろうか。

この推測を支えるかのように、そうした御行の特質を垣間見させる逸話が、『続日本紀』に残されている。

先是、遣大倭国忍海郡人三田首五瀬<sup>ニ</sup>対馬嶋<sup>ニ</sup>、治<sup>ニ</sup>成黄金<sup>ニ</sup>。至<sup>レ</sup>是、詔<sup>シテ</sup>授<sup>メ</sup>五瀬正六位上<sup>ニ</sup>、賜<sup>メ</sup>封五十戸、田十町、并<sup>ニ</sup>絶綿布歛<sup>ニ</sup>。仍免<sup>メ</sup>雑戸之名<sup>ニ</sup>。……又贈右大臣大伴宿禰御行、首遣<sup>ニ</sup>五瀬<sup>ニ</sup>治<sup>メ</sup>金。因賜<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>臣子封百戸、田四十町<sup>ニ</sup>。〈注年代曆曰。於<sup>レ</sup>後五瀬之詐欺発露。知<sup>ニ</sup>贈右大臣爲<sup>ニ</sup>五瀬<sup>ニ</sup>所誤<sup>レ</sup>也。〉

〔続日本紀〕卷二、大宝元年八月七日条）  
右は、大宝建元の契機となつた対馬貢金という出来事の関連記事である。対馬へと人を派遣して貢金を実現させたのは御行の功績であり、その報奨を子に相続させる、と記事は語る。注記によれば、結果としては、三田首五瀬の企んだ詐欺が露見して終わる話ではある。しかし、事件の前提として、御行がこうした資材調達に長けており、そのために対馬にも縁を有すること、そして、その才によつて培つた信用と、彼への信頼感が万人の認めるところとされていたことなどがあつたからであらう。やはり、御行は戦場で華々しい戦果を上げる前線司令官としてではなく、後方にあつて、兵の差配や物資の調達、補給にあたる兵站指揮

において真価を発揮する人物であったのである。「壬申年之乱平定以後」の平時あつては、むしろ、彼のこうした軍政面での実務能力が必要とされたに違いない。

もう一点忘れてはならないのは、同時に兵政官長に任命された唯一の上司である栗隈王が、翌年天武五年六月には病没していることである。任命から一年余りでの欠員に対するその後の補充人事の記録も見えず、御行は事実上の最高責任者として、その後の兵政官の取り纏め役を務めることになった可能性が高い。御行は、後年、天武殯宮において棺が殯宮を離れる際に直前の誅を任されたり、大伴氏氏上への任命、逝去の際の文武天皇の配慮、死後の右大臣追贈といった高い待遇を朝廷から受けることになる。これらの厚遇ぶりは、その才をもってその職責を果たした者への評価であると考えるのが自然ではないだろうか。

### 三

それでは、軍事司令官としてではなく、むしろ軍政面でその才能を発揮してみせた御行の一首に対して、なぜ家持は、「大將軍」の称号を付記したのだろうか。

請田正幸氏は、天武・持統朝期の兵政官の職掌・職務を

分析する中で、七世紀末から八世紀初期にかけての「大將軍」称号にも触れ、次のように述べておられる。<sup>⑦</sup>

大宝令制定以後において、大將軍号を持った人物はどのような人物であるかという点、一つは、下毛野古麻呂や大伴安麻呂のような兵部卿経験者で、議政官の地位を占める人物であり、もう一つは、新田部親王のように、武官を統率する地位にあった人物である。

ここで触れられているように、御行の弟にして家持の祖父にあたる安麻呂も「大將軍」の称号を得た記録をもつ。

大伴宿禰諱曰「安麻呂」也 難波朝右大臣大紫大伴長徳卿之第六子、平城朝任「大納言兼大將軍」薨也

(卷二、一〇一題詞)

右新羅国尼名曰「理願」也 遠感王徳帰化聖朝一  
於「時寄」住大納言大將軍大伴卿家「既選」数紀焉

(卷三、四六一左注)

大納言兼大將軍正三位大伴宿禰安麻呂薨

『続日本紀』卷六、和銅七年五月朔日条)

しかし、請田氏も指摘されるように、それを見るのは『萬葉集』の題詞、左注にある経歴注記と、『続日本紀』薨伝のみである。安麻呂にも「大將軍」への任命記事も見え

なければ、「大將軍」としての具体的な事績は見えてはいない。これは、家持の父旅人が、養老四年に隼人の反乱鎮圧という具体的な任務を帯びて「征隼人持節大將軍」に任命された事例とは、明らかに様相が異なっている。

こうした点を考慮しつつ分析を加えられ、「大將軍」の称号は軍政の長である兵部卿の経歴を持って議政官に上り詰めた者への称号、とする請田氏の推定は本稿にとって大きな支えとなる。

家持が当該二首を筆録するに当たって、第一首の作者として御行の名を耳にした時、「大將軍」の称号を付記することに躊躇いを持たなかったのは、後の兵部省の前身機関である兵政官において、事実上の最高責任者となり、後に大納言にまで昇進する御行の閥歴が祖父安麻呂と重なって見えたものと考えからである。

なお、組織の創設期に御行が上司として仕え、志半ばで世を去った栗隈王は、家持が頼みとする時の左大臣橘諸兄の祖父である。御行の閥歴をたどることで祖父の世代に思いを馳せ、そこで結ばれた不思議な縁に、家持自身も感慨を感じたはずである。「大將軍」称号は、そうした思いも加わっての注記と本稿では考える。

ここで、もう一度、兵政官の職掌を確認してみたい。

下向井龍彦氏は、七世紀から八世紀にかけての日本律令軍制の形成過程を詳細に分析する中で、天武・持統朝に固有に見られる軍事政策と天武朝の史料にのみ現れる兵政官との関連性にも考察を加えられている<sup>(8)</sup>。

創設当初の兵政官の独自の任務は、これから建設しようとしている律令軍制の基本構想を策定し具体的政策を立案する作業であったとみたほうが現実的であろう。

そして、その重要な業務の一つとして儀仗制の整備とその実現のために不可分な陣法の制定をあげておられる。その必要性を、氏は次のように述べる。

一般に律令国家の国家儀礼は、天皇と諸蕃・夷狄の關係、天皇と公民の關係、天皇と官人の關係を象徴的に表現し、再確認する演劇であり、さらびやかに盛装した儀仗兵の整然とした列立と鼓吹のリズムに合わせた一糸乱れぬ分列行進は、天皇の莊嚴さと律令国家の強大さを際立たせるほどに華麗かつ莊重に演じられなければならない。律令国家建設期である天武・持統朝に官人武裝化という形式で儀仗制の整備が急がれたの

はそのためである。

御行が担った兵政官の職掌に、こうした儀仗制の整備が含まれるのは、当該二首の成立事情にとって、示唆に富むものである。唐に倣い律令制のもとでの中央集権を目指す新体制にとって、共通化された陣法とそれに基づく兵馬の動き、その訓練成果を確認する儀仗の場は、天皇を現人神と仰ぎ讃美するには最適の仕組みである。こうした場を準備し具体化する中で、儀仗の場にふさわしい歌も要求されたのであろう。二首に共通する「大君は神にしませば」という新時代を象徴する発想をこめた歌句は、儀仗の場にあつて高らかに歌い上げられてこそ輝きを放つ。御行の一首は、こうした要請に応じてのものであつた、と本稿は考える。次に、こうした本稿の立場を、当該二首相互の関係からも確認してみたい。

第二首は、作者未詳とされている。この点について武田全註釋のように「いづれかが、三句以下を置きかえて作つたもの」と理解し、二首の成り立ちを個別のものとしてとらえる立場もある。しかし、二首それぞれを単独の作としてとらえるには両者の関係は思ひのほか緊密である。堀勝博氏も指摘されるように、「赤駒」と「水鳥」の暗示によ

る南北対比の構造は、二首が個別にあつては意味をなさないものであろう。<sup>9</sup> 加えて、「田居」が泥田であろうと陸を象徴し「水沼」が水を象徴するとするのならば、こうした陸水対比で唱和する構図は、天智挽歌群の次の例にも既に見られる。

かからむとかねて知りせば大御舟泊てし泊まりに標結  
はましを

(巻二、一五二)

楽浪の大山守は誰がためか山に標結ふ君もあらなくに

(巻二、一五四)

波紋型対応を示す四首一組の作品中、歌句の共有とまではいかないが、共通の語句をそれぞれの歌中にもつて歌い継ぐ、巻二相聞歌などの初期萬葉歌から見られる唱和の作法にかなったやり取りである。

これらの唱和の構図をもとに当該二首を見た場合、閔兵に臨む天皇に対して、第一首を儀仗の場の最高責任者たる御行が歌い上げ、それに続けて第二首を一同が唱和する姿と想定してみるのはどうだろうか。左注に言う「作者未詳」は、そうした用途に基づく注記ではないのかと本稿は考える。天武・持統朝には、天皇による校閲を前提に裝備

の自己調達と自己訓練を命じる記録が数回ある。実際に関兵の場が設定された記録も残っており、特に次の天武十年十月の例は大規模なものであったらしい。

是月、天皇將<sub>レ</sub>蒐<sub>二</sub>於<sub>一</sub>広瀬野<sub>一</sub>、而行宮構訖、装束既備。然車駕遂不<sub>レ</sub>幸矣。唯親王以下及群卿、皆居<sub>二</sub>于<sub>一</sub>輕市<sub>一</sub>、而檢<sub>二</sub>校<sub>一</sub>装束鞍馬<sub>一</sub>。小錦以上大夫、皆列<sub>二</sub>坐<sub>一</sub>於樹下<sub>一</sub>。大山位以下者、皆親乘之。共随<sub>二</sub>大路<sub>一</sub>、自<sub>レ</sub>南行<sub>二</sub>北<sub>一</sub>。

〔『日本書紀』卷二十九、天武天皇十年十月条〕  
儀仗の場を用意するのは、兵政官の職務であり、最高責任者としてその陣頭に立ったのが御行であった。当該二首は、こうした場の要請に応じて用意されたものであり、二首一体でなければならなかった。

なぜならば、そこで目指されたのは、現人神の元に結集した集団の一体感醸成であり、そのためには、その場に集う人々の胸に深く届く表現が必要とされたからである。歌中に歌われる「都」がいずこであれ、不可能を可能にしてみせた、との超越的表現には、かえって理解が容易な具体的形象が求められたのであろう。第一首の「赤駒の腹這う田居」も、第二首の「水鳥のすだく水沼」も、そのような

状態から成し遂げられた事業の偉大さが理解されれば良いのである。むしろその讃美の眼目は「大君は神にしあれば」の上二句に焦点が置かれているのであり、そうした超越的な事業を実現してしまう神に等しい天皇にこそ向けられているからである。

#### 四

最後に、当該二首の左注に記された「天平勝宝四年二月二日」の日付と、簡潔に「聞之即載於茲也」とのみ記す家持の意図を検討し一案を述べてみたい。この点については、市瀬氏に先掲の論考がある。しかし、残念ながら「天平勝宝四年二月二日」の日付の件については、特に踏み込んだ言及が見られない。以降の歌を天平勝宝四年のものとして一括するため、とする諸注がほとんどの中、『注釈万葉集《選》』の井村哲夫氏の注は、当該二首を「淨御原宮完成を祝う儀式で誦詠された」とした上で、三ヶ月後に迫った大仏開眼会との関連性について触れ、次のように述べている<sup>⑩</sup>。

左注に、右の二首は天平勝宝四年（七五二）二月二日に聞いて、ここに載せたとある。その三ヶ月後に予

定されていた大仏開眼会（四月九日）には、大伴・佐伯両氏はそれぞれ二〇人の舞人をさしだし、大伴伯麻呂（壬申の功臣馬來田の孫）と佐伯全成が、大歌久米舞の頭を勤めることになっていた（『東大寺要録』供養章第三・大仏開眼会）。大伴氏の伝統的な歌舞奉仕を準備していたこの時期に、八〇年前の祖先の晴れがましい献上歌が、家持の耳に入ってくる事情もあったのであろう。

「二月二日」とある日付の必然性に触れた、注目すべき見解である。たしかに、この年は、大仏開眼会の行われた年であり、大伴家持が「聞之」と記す二月二日は、その約三カ月前である。盛大な行事を前にして高まる機運も無視できない状況であっただろう。家持自身も官人としての立場からは大仏開眼会に無縁ではいられなかったはずである。

ところが、卷十九はこの一大行事に関してほとんど無関心を貫いている。唯一の関連歌と見られる卷十八「賀陸奥国出金詔書歌」にしても、鉄野昌弘氏が指摘するように、家持が反応したのは、詔書中に触れられた大伴氏の伝統と変わらぬ忠誠への称賛に対してであり、大仏造営事業の進

展の喜びに対してではない<sup>1)</sup>。第一首作者としての御行の名に反応したのだとしても、聴取の日付にさほど意義を感じないのであれば、たとえば四二四七番歌左注がそうであるように「但年月次者随聞之時載於此焉」と記しておけばよかったのである。井村注も「天平勝宝四年二月二日」の意義は説明し切れてはいない。

そこで、本稿は、同じ『東大寺要録』の「東大寺権別当実忠二十九箇条」に見える次の記述に注目したい。

奉<sup>二</sup>仕十一面悔過<sup>一</sup>事。

合七十年。

自<sup>二</sup>去天平勝宝四年<sup>一</sup>至<sup>二</sup>大同四年<sup>一</sup>毎年二月一日二七ヶ

日間奉仕如<sup>レ</sup>件。

（『東大寺要録』卷七雜事章第十）  
右は、『正倉院文書』にも、天平勝宝五年の年次記録を持つ「十一面悔過所」、「紫微中台十一面悔過所」等の記載記事があることから、東大寺二月堂において現在も続く修二会の創始に関する記述とされている。

山岸常人氏は、この記事を含む「実忠二十九箇条」を中心とした史料に詳細な検討を加え、「天平勝宝四年に実忠が十一面悔過を始めたことを、東大寺に置ける二月堂の創

建として何ら矛盾は生じない」と述べておられる<sup>12)</sup>。『正倉院文書』記事の存在と、この詳細な考察によって、東大寺修二会天平勝宝四年創始は、ほぼ認められているものと考えてよい。

創始当時の悔過法要の実態は不明ではあるけれど、当時、随所で行われた悔過法要の記録から、ある程度の内実は明らかになってきている。速水侑氏は、奈良朝当時盛んに勤修された吉祥・薬師・阿弥陀・観音等の諸仏を対象とした悔過法要を概観し、その目的は「諸霊追善と招福除災の現世利益」を共通基盤としていたと述べる<sup>13)</sup>。実際に、前掲の「実忠二十九箇条」の当該記事も、実忠の主導した法要として「奉仕涅槃會事」、「奉仕半月經事」と続けた後に「右三條事。奉為先々尊靈。後々国家」と記している。

家持が、御行の歌を含む当該二首を聞いたとすれば、大仏開眼を四月に控えた、この東大寺における十一面観音悔過法要に、天武天皇追善のための古歌が献じられたことが契機ではないのだろうか。当時の法要が歌を伴うことは皇后宮の天平十年十月の維摩講における「仏前唱歌」（卷八、一五九四）の存在が確かな例となる。また、大仏開眼会にも元興寺より歌の献納がなされた記録が『東大寺要録』に

残されている。

大仏開眼会を前に、当の東大寺が関与して十一面観音悔過が行われるのは、当日の成功を願うてのことであろう。その悔過法要の場で、天武天皇が振り返られるのは自然な成り行きである。その追善供養として、不可能を可能にしてみせた偉業を讃美する当該二首が歌われたのは、空前の事業として大仏を造営する聖武先帝への讃美としても重なってゆくからである。家持が「二月二日」と記したことに意義を見出すとすれば、この点ではないだろうか。

一方、当該二首の題詞・左注が簡潔であるのは、家持の大仏造営そのものへの違和感からくるものである。聖武天皇の出家を契機とした生前讓位と孝謙女帝の後継者を巡る先行きへの不透明さは、時代の空気を淀ませはじめていた。前例のない事態を前にして、人毎にその解決への処方箋は異なっていた。「歌日誌」の様相を見る限り、大仏造営と開眼法要は、家持にとっては選択肢ではなかったのである。忍び寄る閉塞感の中、白鳳の世の再現を希求していた家持にとって、御行の歌の再評価は、心惹かれる出来事であったに相違ない。しかし、伝誦の場そのものに強い関心を持ち得ないのであるなら、題詞、左注にそれが記され

ないのも自然な成り行きである。

注

- (1) 市瀬雅之「天平勝宝四年二月二日の採録歌——『壬申年之乱平定以後二首』と家持——」(『中京国文学』第十四号、二〇〇五年三月)
- (2) 辰巳正明「大君は神にし坐せば——壬申の乱平定以後の歌二首」(『國語國文』五十四卷四号、一九八五年四月)、遠藤宏「『壬申年之乱平定以後歌二首』の成立年次についての試論」(『成蹊國文』第三十八号、二〇〇五年三月)等
- (3) 土橋寛「伝飛鳥板蓋宮出土の木簡と万葉集」(『文学』五十四卷十号、一九八六年十月)
- (4) 菊地義裕「壬申年之乱平定以後歌二首——成立の時と場をめぐって——」(『東洋大学短期大学紀要』第二十三号、一九九一年十二月)
- (5) 下向井龍彦「日本律令軍制の形成過程」(『史学雑誌』第一〇〇巻六号、一九九一年六月)
- (6) 『國史大辞典』(当該項目は青木和夫氏担当)は「『兵官』とせずに『政』の字を加えているのは、この官庁が直属の武力を持たず、軍政や武官人事を担当するのみであって、律令制の兵部省と同じ性質の官庁であったことを示す」と説明している。
- (7) 請田正幸「七世紀末の兵政官——新羅官制と比較して——」(『ヒストリア』八十一号、一九二八年十二月)  
なお、請田氏は、「大將軍」称号を新羅官制の影響を受けた兵政官長の別称とされている。大伴氏が朝鮮半島との縁を少なからず有する点を考慮すると魅力的な説ではある。
- (8) 下向井氏前掲論文
- (9) 堀勝博「赤駒の腹ばふ田居を都となしつ——壬申乱平定以後二首について」(『ことばとことのは』十号、一九九三年十月)
- (10) 『注釈万葉集』《選》(一九七八年十二月)
- (11) 鉄野昌弘「賀陸奥国出金詔書歌」論(『萬葉』第百五十五号、二〇〇五年十一月。後に『大伴家持「歌日誌」論考』二〇〇七年一月に収録)
- (12) 山岸常人「東大寺二月堂の創建と紫微中台十一面悔過所」(『南都仏教』四十五号、一九八〇年十二月)
- (13) 速水侑「観音信仰」(一九七〇年八月)  
(本学日本語日本文学科教授)